

“フィールド”から“わかる”ということ

—— “調査” についてのいくつかの考察

高畑 由起夫*

この私自身は、一体何者か。それこそ、私が第一に探求せねばならないものだ。なぜなら、他者の中において自己を認める、という人類学者が人間の知識に課した目的に到達しようとするならば、まず第一に、自己のうちなる自己を拒否しなければならないからです。

レヴィ=ストロース『人類学の創始者ルソー』より

■ 要 旨

本稿では、人類学・社会学系のフィールド調査について、個人的経験をふまえて考察を試みた。1980年代以降、人類学には多くの批判、自己反省等がよせられ、現在も議論が続いている。構造主義人類学者C・レヴィ=ストロースはJ・J・ルソーを「自分以外の人間を知ることにより自分を知ろうとした」最初的人类学者と称えている。この視点に立てば、人類学とは“自己”と“他者”の比較のうちに、“自己”を理解する作業でなければいけない。しかし、我々ルソーの後継者は“自己”への厳しいまなざしに欠けていた傾向が否めない。こうした現状をふまえて、(1) 新たなフィールドの可能性、(2) “事実”から“解釈”にいたるまでの研究の進め方、さらに(3) 研究者が対象者に対し、無意識のうちに“権力者”としてふるまう問題をとりあげた。とくに、研究成果の多くは、先進国の言葉/専門家の言葉で出版され、インフォーマントを含め、現地の人々の眼に触れることは少ないのではなかろうか。こうした現状は、従来の“文明と未開”の構図とさほど異ならないと言えよう。結論として、ルソーの原点に戻り、“研究者”と“対象”の出会いによって両者とも気がつかなかったものに気づき、それを共有することこそ人類学にとって望ましいと言えよう。

キーワード：フィールドワーク、方法論、パラダイム、人類学

*関西学院大学

1 はじめに

この小論では、フィールド調査の方法論について、自らがたどった研究史を振り返りながら、感じることを述べてみたい。私自身は自然人類学のフィールドワーカーとして、1970年代半ばからニホンザル、チンパンジー、そしてワオキツネザル等を観察してきた。同時に、様々な土地で人々とつきあい、その社会、経済、政治等に触れてきた。幸いにも、当時私が所属していた研究室は化石人類学、生態人類学、霊長類学をひとしなみに扱い、研究室の創設者である今西錦司と、さらに遠祖をたどれば日本の人類学の始祖坪井正五郎がめざした総合的な人類学というイメージをまだ漂わせていたようだ。

その一方で、私のキャリアが始まった時代、既存の学問体系はすでに黄昏を迎え始めていた。“学問的フロンティア”としての“未開／未知”の消滅、あるいは“ヒーローとしての人類学者”の時代の幕切れであり [Marcus & Fisher, 1986=1989: 246-250]、その一方で社会生物学等が勃興しつつあった。こうした混迷のなかで育った世代として、私には完璧な体系からの矛盾なき発言はとうていできることではない。自然科学系の（無味乾燥にも感じられるだろう）コマの進め方に触れた後で、素朴なフィールド信仰が顔をのぞかせたり、あるいは研究倫理について苦言を呈するかもしれない。フィールドワークとはもともとそうした雑駁なものだと強弁するわけにもいかないのだが、しかし、この課題が意外に手ごわいことだけは確かなようだ。

さて、20世紀後半の一時期、人類学者のフィールドワーク、とくに長期にわたる参与観察は一種神話化され、そのイメージは「スーザン・ソントグの的をえた一句、英雄としての人類学者、という肖像」になりかけた [Marcus & Fisher, 1986=1989: 76]。“未開”の地に分け入り、言うに言われぬ困難と戦い、隠された真実を明らかにする“文化英雄”である。もちろん、こうした高揚は一過性に過ぎず、1960年代にすでに『マリノフスキー日記』 [Malinowski, 1967=1987] が物議を醸す等、人類学のありかた全般やフィールドワークそのものへの一連の内省的自己批判、あるいは声高な批判に

つながっていく [Clifford & Marcus, 1986=1996; 太田, 2001]。とはいえ、現在でもなお、フィールドワーカーとは「フィールドワークがほとんど不可能であった状況」においても、「訓練を受けた民族誌学者ならば、実際こうして社会に分け入り、信憑性の高い構造的理解を得て帰ってくる」者という肯定的なイメージで語られがちである [Marcus & Fisher, 1986=1989: 115]。一例をあげれば、20世紀初頭、英・エジプト領スーダンで人類学者エヴァンズ=プリチャードは遊牧民ヌアーを相手に苦闘する。以下は、多くの文献に引用された有名なやりとりである。

私 (エヴァンズ=プリチャード)：君は誰？

チュオル：人間だ。

私：君の名前は？

チ：私の名前が知りたいのか。

(略)

私：そうだ。君は私のテントを訪ねてくれた。だから私は君が誰なのか知りたいのだ。

チ：分かった。私の名前はチュオルだ。あんたの名前はなんと言うのか。

(略)

チ：私のリニイジの名前が知りたいのか。

私：そうだ。

チ：それを聞いてどうするのか。自分の国にもって帰るのか。

私：別にどうするつもりはない。君たちのキャンプに住んでいるから知りたいだけだ。

チ：わかった。われわれはロウだ。

私：部族の名前を尋ねたのではないよ。部族の名前ならもう知っている。リニイジの名前を知りたいのだ。

チ：どうしてリニイジの名前が知りたいのか。

私：もういいよ。

チ：それならどうして聞いたのか。タバコをくれ。

[Evans-Pritchard, 1940=1997: 37]

根負けしたかのように打ち切った後、エヴァンズ＝プリチャードは（隠された聴衆である）読者に「このたぐいの抵抗にあうと頭にくること請け合いである」と独白する。しかし、現代イギリスの社会学者 P・ウィリスが書いた『ハマータウンの野郎ども』を参考にこの展開を吟味すれば、新しい構図／解釈が浮かび上がるかもしれない。この著作は、イギリス新制中学に在籍する労働者階級の子弟たちが学校や制度に反抗しながら、結局、父親たちと同じく労働に順応していく様を描写しているのだが、ウィリスと情報提供者（インフォーマント）である“野郎ども”との次の会話はどうかろう。

筆者（ウィリス）：教師のことを、みんなは敵かなんかのようになって
いるのかい？

（だれということなく）：そう。そんなとこだ。たいがいはそのうだ。

ジョウイ：人生、ちょっとおもしろくしようと思うんなら、教師がし
てくれたことになにかお返しをしてやることだよ。

[Willis, 1981=1996: 33]

このジョウイの言葉こそ、D・デイドロ作『ラモーの甥』でへぼ音楽師ラモーが叫ぶように、「ラプレーの修道士の知恵」のごとく「自分の安泰のためにも、他の人々の安泰のためにも、本当の知恵」かもしれない [Diderot, 1805=1964: 13]。もしそうだとすれば、遊牧の民チュエルがフィールドワーカー（＝ひょっとして植民地行政の手先かもしれぬ者）を訪れた際、「人生に少しばかりスパイスを効かせよう」としてか、なぶるように発する言説も、甥ラモーの台詞同様に含蓄に富んだものにも見えてこよう。そもそもフィールドワーカーとは、たんなる知識としての「リニージの名前」を知ることより、こうした彼我のやり取りでの“間合い”を読み取り、“事実”に間違いのない“意味付け”を行う存在のはずではないか。とすれ

ば、ヒーロー像をいったん脱構築化した後、フィールドワーカーに何が約束されているだろう？

2 フィールドと研究

2.1 フィールドとは何処か？ そして、“対象”とは誰か？

私はまる1年間、イバラの原野の中で過ごすことを思い立ったが、実は長い間ためらっていた。その結果が私の計画とおりにゆかないだろうと懸念したからではない。私の念願は、特殊な場にたてこもって人間の本質を深く知るといよりは、アメリカ大陸を理解することであった。

レヴィ＝ストロース『悲しき南回帰線』より

フランスの人類学者C・レヴィ＝ストロースは、18世紀の哲学者J・J・ルソーを「自分以外の人間を知ることにより自分を知らうとした最初の人間である」として、人類学の始祖と称えている [Lévi-Strauss, 1962 a=1969 : 56-58]。つまり、人類学とは“自己”と“他者”を比べるうちに、“自己”を理解する作業なのだ。その一方で、当然、彼我の差が大きいほど差の認識は容易で、未知の現象を発見する喜びも大きい。こうして帝国主義の発展にともないフィールドワーカーたちは“未知／未開”のフィールドへ飛び立った。

例えば、レヴィ＝ストロース自身、1934年のパリのある日曜日、高等師範学校学長S・ブーグレから前触れもなく電話で尋ねられる [Lévi-Strauss, 1955=1971 : 61-67]。

「きみはやはり民族学をやる望みを持っているかね」「もちろんですとも」

「それでは、サン・パウロ大学社会学教授の志願書をだしなさい。サン・パウロの周辺地にインディアンがたくさんいるから、きみは週末に彼

らの調査にあてることができるだろう」

こうして送り出された“日曜民族学者”候補生は、すぐにサン・パウロ郊外には先住民がほとんどいないこと、もし彼らを研究したければ数千キロも離れた僻地に行くべきことを知った。地球を半周ほどした後の“ロンドン電信線地区”での体験は、しかし、10年という熟成の日々の後、レヴィ＝ストロースに構造主義の幕開けとなる『親族の基本構造』を脱稿させ、さらに6年の間をおき畢生の傑作『悲しき南回帰線』を書かせることになる。

話を急ごう。後継者たちは、ルソーの洞察通りに振舞ってきたとは言えないようだ [Clifford & Marcus, 1986=1996]。彼らがフィールド（＝未開の地）で見出すものは、一見奇怪で理解しがたい“野蛮”な風習、制度、社会だが、しかし近代主義で武装した彼らはためらいもなくそうした習慣も（“野蛮人”自身には明確に意識されない）合理的な理由が潜んでいたり、あるいは歴史のいたずらでたまたま遺存しているだけだ、と納得するのである。ルソーにとって肝心な“自己”への視線が上滑りすることも自覚せず。その上で、人類学者たちは読者（＝研究対象の先住民等が想定されることはなく、先進国でこうした奇怪な習慣に心躍らせている者たち）に解説する役まわりを果たしてきた。レヴィ＝ストロースも『悲しき南回帰線』の冒頭近くで、「わたしにはいまだに不可解なことではあるが、この種の話がえてして世の好評を博すのである」と評しているのだが [Lévi-Strauss, 1955=1971: 12-13]。

なお、このような構図にいち早く異議を唱えたのは、18世紀に勃興した百科全書派であった。とくにディドロは『ブーガンヴィル航海記補遺』で、“高貴な野蛮人”というアンチ・テーゼを唱える [Diderot, 1796=1953]。それ以来、20世紀の『パパラギ』 [Tuiavii & Scheurmann, 1920=1981] に至るまでヨーロッパ系文化は“未開”に対して、“高貴さ”と“野蛮”という二つの印象の間を揺れ動くのだが、それは“他者”を見た眼でどこまで“自己”を問い直せるかという永遠の課題につながっている。

さて、“新奇”を求めようとすれば、フィールドワーカーは勢い“コレク

ター化”する。だが、それは何時まで続くわけにはいかない。私自身、鮮明に覚えていることがある。修士1年の時、同級生が（研究室がフィールドとしてきた沖縄ではなく）隠岐で研究すると決まった際、ある教員が「いやあ、沖縄って、意外にフィールドとして使えたのは短かったですね」と言ったものだ。すると、フィールドとは“有限な資源”で“枯渇してしまう”のか？ 我々の仕事とは、つまりは誰もやっていないことを掘り尽くし、なくなったら他所に移ることなのか？ この時覚えた違和感を、私はいまだ完全に整理しきってはいない。

その一方で、フロンティアの枯渇は、若手の研究者を、一つは古い考えの見直し（リヴィジニズム）という道に、もう一つは文化変容やクレオール等への傾斜に走らせる（前者で有名な例は、M・ミードの『サモアの思春期』へのD・フリーマンの攻撃だろう [Clifford & Marcus, 1986=1996: 190-192]）。しかし、それ以外に道はないのだろうか？ ヒントはひょっとしてデイドロかもしれない。彼のフィールドはどこか？ ブーゲンバリア島ではない。彼が『ブーガンヴィル航海記補遺』で、先住民とヨーロッパ人の会話に仮託したものは、つまるところ、ヨーロッパ知識人の自己認識の問題に過ぎない。したがって、デイドロのフィールドは、「特殊ではない場所」、例えば1761年の4月某日のコーヒー店ラ・レジャンスであり、その店先こそがラモーの甥と出会い、彼我の差異の激しさに、自らもまた観察対象となったフィールドなのである。

そうだとすれば、人類学にとっての最後の秘境は、哲学者と同じく自分自身にほかならず、起きてから寝るまでのすべてが我々のフィールド体験と言えなくはない。そんな視点で見れば、現在の大学人にとって、大学こそもっともホットなフィールドの一つであるべきかもしれない。

2.2 フィールドに何を見つけるのか？

それでは、我々は自らのフィールドに何を見つけるのか？ まず、きわめて卑近な例をあげよう。私の講義で時折、例にあげるアメリカ資本主義のアネクドートである。

靴の会社のセールスマンが乗った船がアフリカの港に近づく。あたりを見回すと、みんな裸足で歩いている。A社のセールスマンは「ここは靴のマーケットにならない。みんな裸足で歩いているから、商売にならない」と本社に打電するが、B社のセールスマンは「ここはすばらしいマーケットがある。みんな裸足だから、すべての人に靴を売り込めば商売になる」と送る。どちらが正しい資本主義者か？

ここで問題になるのは、個々の判断の可否ではなく「みんな裸足で歩いている」という“事実”に対して“解釈”が正反対になることだ。もちろん、第3の解釈＝仮説もありうる。C社の担当者は「巨大なマーケットだが、現在の経済状況では靴が買えないから、潜在的なものに過ぎない。将来性を考えて、モニタリングを続ける必要がある」とするかもしれない。こうして一つの“事実”から浮かび上がる“解釈＝仮説”群を、自然科学では代替仮説と呼んでいる。なお、“仮説”というのは、何も数々の文献を読破して、あるいは立派な“理論”を駆使してひねり出すようなものだけではなく、目の前の事実について我々が下す解釈のベースにあるもの、あるいは“見通し”程度のもも含まれている（[佐藤，1992：83-91]も参照）。このような「すでにある程度分かっていることを土台（根拠）にして、まだよくわかっていないことについて実際に調べてみて明らかにするための見通し」[佐藤，1992：85]を“作業仮説（作業を円滑に進めるために一時的にたてた仮説）”と呼ぶ。もちろん、この“見通し＝作業仮説”が、既存の理論＝後述するパラダイムを打ち破る（ブレイクスルー）することこそが望ましいのであるが。

ただし、ここでもう一つ付け加えれば、まず、我々はすべての“事実”を“認知”することはできない。情報量が多すぎて処理しきれないためか、我々は自分が見たいものだけを見て、見たくないものは意識的／無意識的に心を閉ざす傾向がある。このようにして近代科学は不必要と思ひ込んだ情報を落とすことで、目的とする情報を詳細に分析する方向へ突き進む。哲学者M・フーコーが指摘するように「17世紀以来、観察というものは、ある種

のものを体系的に除外するという条件とする感覚的認識となった」のである [Foucault, 1966=1974: 155]。この先がいわゆる還元主義にはかならない。こうなると、どんな方法論をつかって、何を“認知”したのか？あるいは、他の研究者に見えていない側面をいかにうまく“認知”して、かつ、それをベースに巧みな“作業仮説”をたてるか、ということこそ、研究者間の競争になるのである。

その上で、我々が“事実”から下す“解釈=仮説”は正しいのか？ そもそも、我々の解釈がかくも分岐してしまうのは、何が原因か？ さらに、我々は既存の思い込みにそって“事実”を解釈しているだけではないのか？ こうして我々は、科学哲学で言う“パラダイム=色眼鏡”をかけていることに気づく。さらに大きな問題は、我々が見ている“事実”は、本当に存在しているのか、あるいは彼我の相互交渉から現れてくるものなのか？ つまり、観察者と対象・情報提供者（インフォーマント）はある種の共犯関係にあるのではないか？ フィールドワーカーはかくも多くの疑問に直面するのである。

3 フィールドワークをどのようにおこなうか？

3.1 研究計画の全体像

自然科学者でもあったゲーテが、20ヵ月にもわたる旅行におもむいたことがある。その記録『イタリア紀行』で、いよいよローマに近づいた1786年9月11日、彼はポーツェンの町について以下のように書きつける。

ポーツェンの歳市では絹物の売行がよく、羅紗類も市に出される……私はここで全部まとめて見られる産物をすっかり調べてみたくならなかったが、……追い立てられる気持ちが……私はすぐにまた出発をする。それでも統計ばやりの当今では……ものの本によって調べることができると思えば、気が休まるというものだ。しかし、現在の私としては、本でも絵でも与えてくれない感覚的印象が大事なのだ。肝要なこと

は……自分の観察力を試験し、自分の学問や知識がどの程度のものであるか、自分の眼が明澄純粹であるのか、どのくらいのことを自分は束の間につかみうるか、自分の身上に刻印されたしわを元通り消し去りうるか否かを吟味することである。[Goethe, 1816=1960: 40-41, 文中一部省略]

この一節こそ、フィールドワーカーに必要な才能をもっともよく表した文章ではあるまいか。なじみのない土地に行き、見知らぬものを見て、自らの観察力と感性を確かめ、その上で得たばかりの先入観を消し去る。しかし、これはゲートといういわば達人の世界であり、我々はもっとつつましく己の能力にあわせるべきだろう。とすれば、ひとまず自然科学の立場から、計画すべき調査の大枠を説いた方がまだしも安全だろう。

まず、近代科学の特徴として“仮説検証主義”が強調される [佐藤, 1992: 83-91]。これは「作業仮説が経験値を説明できるか、否か？」で競われる一種のゲームである。その上で、科学哲学者の K・ポッパーが提唱した“反証主義／批判的合理主義”に則ると、“仮説が間違いであること”は証明できる（反証）が、“仮説が正しいことである”とは証明できないことを知る。こうした世界では、研究計画も厳密に立てることを要求される [Martin & Bateson, 1986=1990: 1-32]。

まず、第一段階は予備調査をおこない、証明すべき仮説（作業仮説）をたてる。次に調査方法を決め、その方法から得られるべき結果として、仮説（理論）から予測（理論値／予測値）を導きだす。あらためておこなう本調査で十分な資料が集まったら、データを処理しながら、仮説にそって結果を検定していく。統計で“理論値”と“実測値”を比較することが基本であるが、解析が進むに依じて結果を絶えずモニターして、“問題設定”や“仮説”へのフィードバックをおこなう。その結果、新しい（調査前には気づかなかった）問題や仮説があらわれてくる。このように、研究は問題設定と調査、その結果得られたデータをめぐってサイクル的に進んでいくのが理想的とされている。

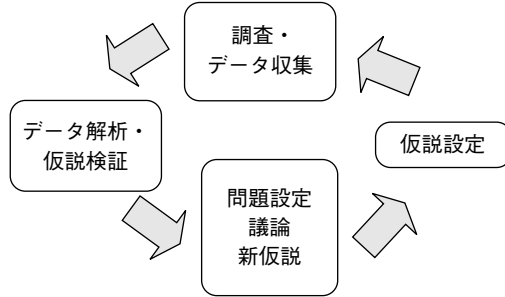


図1 研究のサイクル

こんな風に仕事が進んでいけば、どんな間違いも起きないはずなのだが、フィールド調査は実のところかなり難しい作業である。再現性を期待できる“実験”と違い、フィールド調査は一過性が強く、やり直しが難しい。“未知”なフィールドほど、出かける手段も時間も限られる。したがって、事前準備に怠らない方が良いのは当然である。とは言え、『悲しき南回帰線』に明らかのように、予想とまったく異なる現地をまのあたりにして呆然とするのも、また良き体験ではある（それ自体が、現場から仮説へのフィードバックに他ならない）。

3.2 課題の階層性を意識する

さて、フィールドワーカーが取り扱うべきテーマは、複雑な関係の中に全体像をなかなか掴ましてくれない。そんな時、テーマを階層的に整理してみるのも悪くはないかもしれない。ここでは、気候学者の住明正にならって、整理法を考えてみよう [住, 1993: 129-130]。

とりあえず、ここでは“死”というテーマをとりあげよう。我々にとって“死”はどのような意味をもつのか？ 住がまず設定する第1のレベルは自然科学、つまり純粋科学である。ここでは“死”はまず事実であり、始めに取り組みべき疑問は「死はどんなメカニズムで訪れるのか？」に他ならない。実際には、すべての生物の死に当てはめることができる説明は存在しない。例えば巨木には“寿命”はなく、台風等による不慮の事故か、巨大化し

表1 問題の階層性（住 [1993] を参考に作成）

レベル	地球温暖化	死
1. 純粋科学	温室効果ガスで本当に温暖化するのか？	人（他の生物）はどんなメカニズムで死ぬのか？
2. 応用科学	温室ガスをどうやって規制する／処理するか？	死を遠ざけるためには、どんな治療法、衛生状態が良いか？
3. 社会経済法	規制を有効に働かすための社会制度（例えば、炭素税）の整備	医療や衛生を整備するための法、経済、社会制度の整備
4. 価値観・倫理学	人間の生き方、ライフスタイルは今のままでよいのか？	人権、医療倫理、死生観

過ぎた時に訪れる“物理的な死”で生命を終える。一方、1年草は限られた寿命の中、種=子供への投資を最大化するように“進化”してきた。研究者は淡々とそのメカニズムをチェックする。ここで強調しておきたいのは、こうした“事実”は“価値観”と無縁だということである。

次のレベル、応用科学は一転して“価値観”をベースにしている。近代医学でも民族医学でも、根底に「死にたくない／病気にかかりたくない」という意思が潜む。その実現のため、薬を開発し、治療を施す。民族ごとの医療体系を記述し、そして裏に潜む疾病観を探るのが医療人類学のフィールドワークだ。また、近代社会でも、医療技術の導入や普及（例えば、産婆から産婦人科への変化 [松岡, 1985] や生殖医療 [柘植, 1999]）もここに含まれるだろう。これらの課題はさらに次のレベルにつながっていく。

第3のレベル、政治・経済・社会はさらに複雑である。まず、法的に“死”をどう定義するか？“死者”の定義は同時に“生者”のそれでもあり、“自然科学”での定義と微妙にずれることもある。自然科学者は不満を抱くかもしれないが、そもそも論理階梯が異なるのである。さらに“保健衛生”のための法体系や、治療をめぐる社会的利益とコストのバランスなどの医療政策、医療倫理や情報公開も問題となってくる。また、“葬式”等の儀礼がコミュニティで意識／無意識的に果たす機能、儀式の伝承／変容、形式の地域／民族ごとの比較にも意味があるだろう（こうして膨大なコレクター

的な仕事が蓄積されていく)。問題は、そうしたデータを基に“我々自身”を見つめなおすことなのだ。

そして最後は言うまでもなく価値観や倫理、宗教等のレベルである。死生観、脳死や尊厳死をめぐる問題、インフォームド・コンセントを筆頭にする医療倫理から始まり、我々のライフスタイルについて、個人の価値観と社会のそのバランスをどのようにとっていくべきなのか？ したがって、まず、フィールドワーカーは「自分の研究がどのレベルにあたるのか？」について熟慮する必要がある。もちろん、それは他のレベルについては眼をつぶってよいということではないはずである。

3.3 パラダイムという色眼鏡——便利さと限界

ここでもう一度確認したい。例えば、前節で“進化”という言葉や、何の説明もなく使った。これには「読者も進化という概念を当然知っているはず」という前提が潜む。これは正しいのか？ “進化”という言葉を使うことは、「ダーウィン以来の進化論の“パラダイム”にそっている」との暗黙の前提のもと、すべての現象を「進化」という時間軸を意識しながら見ることを意味するのだが。ここでは、こうした色眼鏡の便利さと限界に触れてみよう。

科学の歴史は“理論（思想）”と“経験（実測／観察・実験）”のせめぎ合いである。例えば、天動説と地動説の論争も、決着は“星の運行”という観察（経験）値と理論からの予測値との誤差の少なさで決まった。しかし、理論はいわば「時代の子」であり、自ずと制約があることに、科学史家たちは気づかざるを得ない。こうして、科学哲学者の T・クーンは、特定の時代において「暗黙のうちに研究の指針とする手続きや考え方の集大成」を“パラダイム”と名づけた。例えば、日本が近代医学を受容するにつれ、西洋から以下のようなパラダイムが次々ともたらされた。

- (1) 外科手術のパラダイム
- (2) 細菌学のパラダイム → やがてウイルス学のパラダイムが派生
- (3) 化学療法のパラダイム → やがて抗生物質のパラダイムが派生

(5) 疫学（病気の生態学）のパラダイム

(6) 免疫学のパラダイム

こうした流れのなかで、様々な悲喜劇が起きている。19世紀後半、脚気患者対策として海軍軍医総監だった高木兼寛は疫学的パラダイムにもとづいて「脚気＝食物由来説」をたて、麦飯の導入で予防に成功した。対照的に陸軍側はコッホ・パスツールの細菌学的パラダイムを信奉して高木の説を否定したため、結果として多大の患者・死者を出した。

問題なのは、我々が“事実（それが「アフリカの港ではみんな裸足で歩いている」ことであれ、「外国で食事を取ったら脚気が治った」ことであれ）”を“解釈”する際、既存のパラダイムという色眼鏡を使うことにある。実をいえば、パラダイムはとても役に立つ。コッホらが確立した“細菌学”のプロトコルにそって研究すれば、次々と細菌が見つかり、治療法が開発された。しかし、（上記の脚気のように）パラダイムが役に立たない場合はまったく無効なのだ。というより「役に立たないこと」自体を自覚できないのである。こうした膠着状態を新しいパラダイムで突破することこそ、“ブレークスルー”に他ならない。

この結果、近代科学は、当座のパラダイムに全面的に頼りながら、そこに全幅の信頼をおくことを躊躇う“ダブル・バインド”状態に陥る。くわえて“反証主義”が醸し出す正当性についての絶え間ない疑問ゆえ、我々は絶えず不安を覚える。そうかと言って、いまさら自らの感性に頼ることもまたできない。『文化を読む』の序で社会人類学者の谷泰が「印象で物事を語ってはならない。また印象で物事を理解してはならない。若いときに親からいわれたこのような言葉から、われわれはいつ自由になるのだろうか」と自問するように、“己”が“他者”に感じるイメージについてどうして正当性を自明のものと主張できないのか、大きな悩みになっている [谷, 1991: 9-16]。

3.4 方法を選ぶ

フィールドワークについての議論が難しいのは、「それでは実際にはどん

なことをすればよいのか？」と問われても容易に答えられないことだろう。実際、我々ができるのはすでにおこなわれた仕事に難癖をつけることぐらいではなかろうか？ パラダイムが古い、標本数が足りない、視点が偏っている、正しい統計処理をしていない、云々。

とくに近年、方法についての議論はやかましい（〔佐藤，1992〕等を参照）。先ほども述べたように、“仮説検証主義”は反証可能な仮説、その仮説を検証できる資料と検証方法を要求する。フィールドワークでは、こうした制約に応えるのもっとも“ロブスト（頑健）”な調査法はアンケート法ということになる。もっとも、アンケート法の細かなスキルについては、質問文の作り方、統計方法の選び方、検定の仕方等、多くのテキストがあるので、ここでは詳しくは述べない。

私自身はアンケート調査にただ一度しか参加したことはない。一地方のニュータウン住民の環境問題への意識調査で得られた資料は、しかし、項目間の相関を集計していくと作成者も回答者も予想しなかったような結果が浮かびあがり興味深かった。野生動物のフィールド調査では苦勞の末にほんの少しばかりの資料を得るだけなのに、アンケート結果や（ゲーテも触れた）統計資料とをパソコンにぶち込めば、瞬時に結果が出るのである。

実は、統計処理にかかる前、私はニュータウンに住む新住民は環境に対する意識も高く、実践もしていると思い込んでいた。しかし、結果は全く逆で、周辺の農村地帯に住む高齢者ほど（自分ではそれと意識することなく）環境に良いことを日々おこなっていたのである。少し考えればわかることだが、昭和30年頃までの持続可能な生活の経験をもつ人々の暮らしの方が、結果として環境に優しい、その当然さを教えられたわけだ。

アンケート法の対抗馬が、参与観察法とインタビュー法である〔佐藤，1992：22-82〕。アンケート法がともすれば大量のデータを駆使して定量的調査に突き進むのに対して、インタビュー法や参与観察法ではより少数の対象に深く定性的調査をおこなう。この二つのベクトルはもともとトレード・オフの関係にある、もちろん、双方を併用してもかまわないのだが。

ウィリスは『ハマータウンの野郎ども』での方法論について「統計学的な

定量分析ではなく、被調査集団に参入して行う定性的な記述方法、つまり、文化人類学的な生活誌の方法をとっている」「授業を含むあらゆる学校生活と放課後の気ままな活動には、筆者みずからその場に向いて観察した」「定期的に集団で話し合う場を持ち、会話はテープに記録した」、そしてさりげなく“注”で付け加える、「この現実をイギリスについて実証する統計結果は無数にあり、どれも大同小異である」[Willis, 1981=1996: 20-27]。まさに理想的な“参与観察”といえるだろう（ウイリスの存在によって“野郎ども”の行動へバイアスがあった可能性は？ という野暮なコメントはよそう）。マーカス&フィッシャーは、『ハマータウンの野郎ども』を、民族誌による文化批判の試みとして（多少の不満を漏らしつつも）高く評価している [Marcus & Fisher, 1986=1989: 158-160, 243-246]。

さて、“インタビュー”の比重が高まると、いつしか“聞き取り調査”となる。柘植あづみの『文化としての生殖技術』は、不妊症の治療をめぐる、医師からの聞き取りを分析しているが、読者に印象的なのは「語り」であろう。未婚の女性医者が、独身女性がAID（提供精子による人工授精／非配偶者間人工授精）で妊娠することの是非を聞かれ、以下のように答える時、その言葉は圧倒的なメッセージ性を持つ。

三島（仮名）：むずかしい。まあそういう場合もあるんだろうなあと思いますけど……（自分自身が現在独身だが）子供は欲しいと思う。でも、自分がそれをやる勇気があるかっていったら（ない）。……すべきじゃないとはいえないって言う、それぐらいのコメントになっちゃう（以下、略）
（[柘植, 1999: 228] 文章を一部改変）

調査者の姿がさらにフェード・アウトして、インフォーマントの声がメインとなれば、独白体になる。そのもっとも優れた例をあげれば、民俗学者の宮本憲一の『忘れられた日本人』、とくに「土佐源氏」ではあるまいか [宮本, 1971: 98-119]。そして、宮本が嫋嫋たる語りに徹しているとなれば、

S・ターケルの『仕事!』は115の職業について135人という数のアメリカ人が、自らの“仕事”を淡々と語っていく様に圧倒される。その冒頭、一人の製鋼所労働者がこう切り出す。

おれは減びつつある人種、肉体労働者だ。ずばり筋肉労働……あげたり、さげたり。1日4,5万ポンドの鉄鋼を扱う。(笑う)……誰かがピラミッドをたてたのさ。なにをたてるにしたって、誰かがたてるのさ。ピラミッド、エンパイヤ・ステートビルただなんとなくできた、というようなもんじゃない。うしろにゃ、きつい仕事があるってもんよ……壁にずらっとレンガ工、配電工から何から何まで、ひとりひとりの名前が刻まれているのを見たいもんだよ。それで、おっさんが息子を連れてきたりして「ほら、45階のあそこに、おれの名があるだろ。おれが鉄骨をいれたんだ」という。ピカソは絵を指さすことができる。おれはなにを指させるというのかね。作家は本を指させる。誰もが、指さすことができる自分の仕事を持つべきなんだ。([Terkel, 1974=1983: 39-40] 文中一部を省略)

こうして、研究対象・情報提供者（インフォーマント）の人々と親しい（人類学で“ラポール”と呼ばれる）関係を築き上げ、共同で研究を進め、そして発表する。そういう形ですべてうまくいくのだろうか？ そこにはさらにいくつか落とし穴が待っているかもしれない。一つは次節で触れるように、研究者が無意識のうちに“権力者”となっていく危険性である。さらには、研究者とインフォーマントの解釈が異なる場合、誰が正しいのか、という疑問である。

3.5 権力者としての研究者、あるいは“オリエンタリズム”と“社会ダーウィニズム”の憂愁

すでに、何度も繰り返した述べてのように、今日のフィールドワーカーにとって、彼我、つまり研究者と対象者の関係は悩ましい問題となっている。我々

はもはやかつてのようにフィールドで文化英雄を気取ることも、自分の無邪気さを一途に信じることも困難なのだ [谷, 1991; Clifford & Marcus, 1986 =1996; 太田, 2001]。

さて、研究倫理とは、研究を遂行する上で“人”として守るべき道や道徳をさす。私の専門の霊長類学では、実験動物の取り扱いが身近な話題だ。これに反すると判断されれば、論文の掲載も拒否されかねない。人類学でも、遺骨等の取り扱いに人権的配慮が欠けている場合（アイヌ、オーストラリア先住民等）や、対象者の人権を無視して発表がおこなわれた場合等、様々な異議申し立てがおこなわれてきた。

舌が乾かぬうちに急いで付け加えるが、我々研究者はいとも容易く“権力者”にすりかわる、無意識のうちに。そのもっとも顕著なものが“分類と命名”かもしれない（[佐藤, 1992: 172-181] も参照）。ものごとを分類し、命名する喜びに最初取り付かれた人たちこそ、デイドロを筆頭にする 18 世紀の百科全書派とその後継者＝近代科学者たちである。彼らは「知識は力であることを悟り、知識の世界を測量してその征服に乗り出し」、「知識にはっきりとした形をあたえて、それを聖職者から奪い、啓蒙主義にかかわる知識人の手に」委ねた結果、世界にかかわる全認識を支配するに至った。その図式は「力の行使」そのものなのだ [Darnton, 1984=1986: 243-273]。彼ら／我々は先住民から地名も、生物名も、制度も、すべての言葉をとりあげていくのだ。

一方で、すべてのものをきれいに分類できるはずもない。“分類”には必ず“ごみ箱”が必要で、“あやふや”なもの、曖昧さで“体制”を不安におとしめるものをそこに封じ込める。例外自体が「私たちの概念が設けている境界（＝ボーダー）を侵犯」して、「私たちを慄然とさせ、また魅惑する」からだ [Darnton, 1984=1986: 244]。こうして、百科全書派＝近代科学は、無意識のうちに、自分たちが創り出した体系から“はみ出してしまう”グレーゾーンへの嫌悪と無視をかきたて、差別の構造を発達させた。

同じような構図が、分類されたものをつなげる作業、すなわち“系統／進化”にも現れる。“社会ダーウィニズム”的な偏見は、“遅れている連中”に

逃れようもないラベル付けをおこなう一方、保証もなしに“進歩”、“進化”、“発展”等に好意的な価値観をふりまく。生物学ですらこうした誤解が横行していることは、進化生物学者のS・J・ゲールドの『フルハウス』等を参照していただきたい[Gould, 1996=1998: 183-198]。ダーウィンが考えた進化には肯定的な意味等なく、ただただ“環境”に対応しながら続く無限の“変化”に過ぎないのに。

なお、“社会ダーウィニズム”に対して、もっとも的を射た論評はレヴィ＝ストロースの“熱い社会”と“冷たい社会”だろう[Lévi-Strauss, 1962 b =1976: 280-281]。後者は、そもそも“熱い社会”が成立しないように注意深く組み立てられた小宇宙なのだ。その世界がヨーロッパという“熱い社会”に否応なしに飲み込まれる、現代とはそんな時代なのである。いずれにしても、E・サイードの『オリエンタリズム』[1979=1986]以後、命名／分類する者と命名／分類される者は、絶え間のない緊張関係を強いられている。

3.6 “真実”を知るのは人々か？ それとも研究者か？

研究者とインフォーマントの解釈が異なる場合、いったい誰が正しいのか？ これも調査者を絶えず悩ませる問題である。1989年に若手の人類学者が中心に開いたシンポジウム「フィールドからわかるということ」でも、この点について人類学者の関本照夫が以下のように述べると、それに応える形で谷泰が発言する。

関本：私にとっていちばん怖いのは私が書いたものを「彼ら」がうそだと言うことですね。おサルさんはいわないでしょう。そこで「いや、俺の見方でこう見たのだからこれでいいのだ」と居直らないのが人類学の自虐的な心地よさだと。

(略)

谷：ただ、現地人に尋ねて正しいといわれたら正しいのか。それでいいのかという私は嘘だとおもうのです。([松田ほか, 1989: 123-

124] 一部改変)

ここで付け加えておくと、「サルは言わない」とはあまりにナイーブな発言であろう。確かにサルが感想を述べることはない。しかし、その代わりに他の研究者が追試をおこない、先行研究の間違い／見落としを指摘していく。研究に再現性が要求される自然科学では、“サル”ではなく、“誤解された被害者＝サル”の代弁者たる“他の研究者”からの異議申し立てに耐えることが要求されているのだ。そして、もちろん、谷が指摘するように、インフォーマントから反論されたからと言って、それが正しいかどうか、確証はない。

長年アフリカの無文字社会モシ王国でフィールド研究をおこなってきた人類学者の川田順造に『サバンナ・ミステリー：真実を知るのは王か人類学者か』という風変わったタイトルの本がある。川田は、ティグレ王が在位33年を経て、改めて王として生まれ変わる儀式につきあううち、王がどうやらいくつかの“間違い”を犯したことに気づく。川田はしかし、さかしらに指摘することを避ける。「私にはティグレ王に、あなたは間違っているなどという資格はないのだ」「ティグレ王が今度のガンバガ回帰儀礼を成功と思って満足しているように、私もまた、人類学的関心から……関係者の間に齟齬を生じるさまをあえて傍観し、『伝承がつくられる』現場に立会い、立場の異なる当事者の解釈を聞きまわってその異同を記録できたことに、満足しているではないか。おそらく、私は私なりに“幸福”なものだから、王様の“幸福”もそっとしておいてやりたいという気持ちになっているのだろう」[川田, 1999: 139]。川田は最後に、この「歴史的事象」についての彼の解釈を、王様やモシの人々も読める形で、フランス語で記しておくことを自らの最低限の義務とする。そして、モシの人々がそれを読んだ結果、「異なる複数の主観が、より高次の間主観的統合に向かうのかどうか。それとも逆に、対立を深めることになるのか。ともかく私は、一步踏み出してみるしかない」と結んでいる。

4 最後に：我々は何のために調査しているのか？

なぜ、我々はフィールドに行くのか？そして、なぜ、研究を発表するのか？この単純そうな問いに、自信をもって答えられる者はどのぐらいいるだろうか。前述のシンポジウム「フィールドからわかるということ」でも、この点については見解をまとめることはおろか、「知りたい喜び」という“素朴なレベル”を抜け出すこともできなかった [松田ほか, 1989]。考えてみれば、この問い自体が、画家に「なぜ描くのか?」、あるいは演奏家に「なぜ弾くのか?」と尋ねる類かも知れず、「そこに山 (エベレスト=チョモランマ) があるから登る」という登山家 G・マロリー以上の答えが出るはずもないかもしれない。

しかしながら、フィールドワーカーが応えなければいけない対象が一つある。それは、先ほど引用した川田 [1999] が書き記したように、研究の対象とされた人々である。すでに多くの批判がよせられているが、多くの民族学／人類学の著作は先進国の言葉で書かれ、インフォーマントはおろか、現地の人々に読まれることさえ期待していない。たびたび引用したウィリスの作品でも、“野郎ども”がこの結果を眼にしたのか、文章だけでは読み取れない。したがって、理想的な参与観察に見えるウィリスと彼らの関係も、旧来の“文明と未開”の構図とさして異ならないかもしれない。

ここで、私の脳裏に浮かぶ光景は、かなり唐突かもしれないが、山本周五郎作『青べか物語』である。作中で“浦粕”と呼ばれる漁師町の細やかなルターージュとも言えるこの作品の後半で、作者は浦粕から脱出後8年目、ある作品の主人公、留さんに出くわす。留さんの「頭があったかい」所業を小説に書いてしまった作者は当惑するが、留さんは「おら（その小説を）宝にするだ」と差かみ笑いをうかべて去っていく。そのさらに20数年後、再び浦粕を訪れた作者は、まるで“罰”を受けるかのように、町の誰もが自分を覚えていないことに直面して（読者とともに）とまどう。この結末の背景に浮かぶ作者の表情には、フィールドワーカーが感じるある種の苦味に通じるものがあるかもしれない。

パリ大学で社会学・人類学を学んだ後、第二次大戦中から戦後にかけて一山村にすみつた、きだみのるの『気違い部落周遊紀行』富山百科文庫版のあとがきに、きだの子息である山田彝が印象的な話を記している。『紀行』の本文にも登場するカッシングという民族学者は、かつてネイティブ・アメリカンのズニを知るため、彼らとともに暮らす。ズニたちはカッシングを「彼らの心を完全に理解した人」として受け入れ、やがて彼を“弓の祭司”に任命する。それ以後、カッシングはズニのことを何一つ外へは語らなくなってしまふ [きだ, 1981: 249]。この寓話めいた話が事実かどうかは、どうでもよいだろう。ただ、この話を聞かされたフィールドワーカーはふっとため息をつく、できもせぬ理想を説かれた後でわが身を省みるように。レイ＝ストロースが説くルソーの原点に返るのならば、“我々”と“彼ら”の出会いによって、どちらも気がつかなかったものに気づき、それを共有することこそ望ましいことと言えるのかもしれない。

謝辞

京都大学自然人類学／人類進化論研究室の故伊谷純一郎先生と故原子令三先生、ならびにそこでともに学んだ皆さんに、そして1980年代後半に京都でフィールド研究者懇話会としてともに仕事をした皆さん、そして私がフィールドで平穩をすくなくならず邪魔してしまった者たち（嵐山B群と屋久島のニホンザル、マハレ山塊国立公園のチンパンジー、ベレンティのワオキツネザル等）、各フィールドでお付き合いした多くの方々に心から感謝の意を表します。また、この小論を書く機会をくださった関西学院大学21世紀COEプログラム『先端社会研究』編集委員会のかたがたにも御礼申し上げます。

文献

- Clifford, James & George E. Marcus eds., 1986, *Writing Culture: The Poetics and Politics of Ethnography*, California: University of California Press. (=1996, 春日直樹・足羽与志子・橋本和也・多和田裕司・西川麦子・和邇悦子訳『文化を書く』東京: 紀伊国屋書店.)
- Darnton, Robert, 1984, *The Great Cat Massacre and Other Episodes in French Cultural History*, New York: Basic Books, Inc. (=1986, 海保真男・鷺見洋一訳『猫の大虐殺』東京: 岩波書店.)
- Diderot, Denis, 1796, *Supplement au voyage de Bougainville*, Paris: De l'Imprimerie de

- Chevet. (=1953, 浜田泰佑訳『ブーガンヴィル航海記補遺』東京：岩波書店.)
——, 1805, *Le neveu de Rameau*, Leipzig: Göschen. (=1964, 本田喜代治・平岡昇訳『ラモーの甥』東京：岩波書店.)
- Evans-Pritchard, Edward E., 1940, *The Nuer*, London: Oxford University Press. (=1997, 向井元子訳『ヌア一族』東京：平凡社.)
- Foucault, Michel, 1966, *Les mots et les choses*, Paris: Gallimard. (=1974, 渡辺一民・佐々木明訳『言葉と物』東京：新潮社.)
- Goethe, Johan W. von, 1816, *Italienische Reise*, Stuttgart: Cotta. (=1960, 相良守峯訳『イタリア紀行』東京：岩波書店.)
- Gould, Stephen Jay, 1996, *Full House: The Spread of Excellence from Plato to Darwin*, New York: Harmony Books. (=1998, 渡辺政隆訳『フルハウス——生命の全容』東京：早川書房.)
- 川田順造, 1999, 『サバンナ・ミステリー——真実を知るのは王か人類学者か』東京：NTT 出版.
- きだみのる, 1981, 『きちがい部落周遊紀行』東京：富山房.
- Lévi-Strauss, Claude, 1955, *Tristes tropiques*, Paris: Plon. (=1971, 室淳介訳『悲しき南回帰線』東京：講談社.)
——, 1962 a, *Jean-Jacques Rousseau, Fondateur des Science de l'homme*, Editions de la Baconniere, Paris: Neuchatel. (=1969, 埴嘉彦訳「人類学の創始者ルソー」山口昌男編『未開と文明』東京：平凡社, 56-68.)
——, 1962 b, *La pensée sauvage*, Paris: Plon. (=1976, 大橋保夫訳『野生の思考』東京：みすず書房.)
- Malinowski, Bronislaw, 1967, *A Diary in the Strict Sense of the Term*, Harcourt, New York: Brace & World. (=1987, 谷口佳子訳『マリノフスキー日記』東京：平凡社.)
- Marcus, George E. & Michael M. J. Fisher, 1986, *Anthropology as Cultural Critique*, Chicago: University of Chicago Press. (=1989, 永渕康之訳『文化批判としての人類学』東京：紀伊国屋書店.)
- Martin, Paul & Patrick Bateson, 1986, *Measuring Behavior*, Cambridge: Cambridge University Press. (=1990, 粕谷英一・近雅博・細馬宏通訳『行動研究入門』東京：東海大学出版会.)
- 松田素二・浜本満・高畑由起夫・太田至・関本照夫・菅原和孝・田中雅一, 1989, 「シンポジウム『フィールドからわかるということ』」『季刊人類学』20(3): 3-128.
- 松岡悦子, 1985, 『出産の文化人類学』東京：海鳴社.
- 宮本常一, 1971, 『宮本常一著作集 10 忘れられた日本人』東京：未来社.
- 太田好信, 2001, 『民族誌の近代への介入』京都：人文書院.

- Said, Edward, 1979, *Orientalism*, New York: Random House. (=1986, 今沢紀子訳『オリエンタリズム』東京:平凡社.)
- 佐藤郁哉, 1992, 『フィールドワーク——書を持って街へ出よう』東京:新曜社.
- 住明正, 1993, 『地球の気候はどう決まるか?』東京:岩波書店.
- 谷泰編, 1991, 『文化を読む』京都:人文書院.
- Terkel, Studs, 1974, *Working*, New York: Pantheon Books. (=1983, 中山容他訳『仕事(ワーキング)!』東京:晶文社.)
- 柘植あづみ, 1999, 『文化としての生殖技術——不妊治療にたずさわる医師の語り』京都:松籟社.
- Tuiavii & Erich Scheurmann, 1920, *Der Papalagi*, Munchen: Felsenverlag. (=1981, 岡崎照男訳『ババラギ——はじめて文明を見た南海の酋長ツイアビの演説集』東京:立風書房.)
- Willis, Paul, 1981, *Learning to Labour*, New York: Columbia University Press. (=1996, 熊沢誠・山田潤訳『ハマータウンの野郎ども』東京:筑摩書房.)
- 山本周五郎, 1961, 『青べか物語』東京:文藝春秋社.

What We Learn from the Field : Several Thoughts on Field Research

Yukio Takahata*

■Abstract

This article presents a discussion on field research in the areas of anthropology and sociology based on personal experiences. A great deal of criticism has been leveled at the field of anthropology, and much introspection undertaken, since the 1980s, and the debates continue today. Structural anthropologist C. Lévi-Strauss named JJ Rousseau the first anthropologist who “tried to know himself by knowing people other than himself.” In this sense, anthropology has to be a process of studying “oneself” by comparing oneself to others. However, we, successors of Rousseau, cannot deny the tendency to avoid looking at “oneself” with too harsh an eye. Given this, I have addressed (1) the potential opportunities that exist in new fields, (2) ways to proceed through research from identifying facts to interpreting them, (3) the unintentional tendency for researchers to behave as if they are the power holders in interactions with their subjects. A great deal of research findings are published in the languages of the advanced nations or the languages of the experts, such that few of the results are actually shared with the local people, including survey respondents. This situation is unlikely to produce a change in the map between “civilized and undeveloped” cultures. I conclude by expressing my desire for anthropology to enable both “researchers” and “subjects,” through their interactions with one another, to become aware of things they had not realized before and to share those insights with others.

Key words : field work, methodology, paradigm, anthropology

*Kwansei Gakuin University